

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

国内外科研修に参加させていただいて

聖マリアンナ医科大学消化器・一般外科

星野 博之

平成29年11月6日から11月10日までの5日間、東京大学医学部附属病院、肝胆膵外科・人工臓器移植外科にて研修させていただきました。東大、肝胆膵外科は世界トップクラスの実績を残されている科で、正直緊張しましたが、東大の先生方は皆様親切で丁寧にご指導くださいました。今回研修で経験させていただいたことをご報告申し上げます。

初日は午前8時から研修における注意事項、一週間の流れなどを説明していただきました。自分は赤松先生を筆頭とする移植チーム（赤松先生、富樫先生、大道先生、工藤先生、古川先生）で研修させていただくこととなりました。説明をいただいた後、途中から手術記事カンファレンスに出席させていただきました。手術記事カンファレンスは前週に行った手術の手術記事を皆で検討するカンファレンスで、どの先生も詳細な手術記事をお描きになられており、その絵はまさに写真のようでありました。絵の上手い外科医は手術も上手いとよく言われましたが、まさにその通りだと痛感しました。一例一例しっかりと振り返り、手術記事を書く大事さを学ばせていただきました。その後直腸癌肝転移症例に対する肝左葉切除術を見学させていただきました。東大の肝切除は、肝門処理が当科のようなグリソン一括処理ではなく個別処理であるため、これも非常に勉強になりました。やはり普段と違う手術を見学させていただくことは新鮮で、解剖などの知識がより一層深まると思えました。その後16時から移植カンファレンスに参加させていただき、初日の研修は終了しました。

2日目は、朝7時よりチーム回診を行い、8時5分から全体カンファレンスに出席させていただきました。この日は小児外科で肝芽腫に対する肝右三区域切除術があり、これを見学させていただきました。その後16時から移植カンファレンス、18時から内科、放射線科などを交えたキャンサーボードに参加させていただき、2日目の研修を終了しました。

3日目は今回の研修のメインである、移植手術でした。朝7時からのチーム回診後、8時から移植手術に立ち合わせていただきました。レシピエントは60歳代の男性、アルコール性肝硬変に対する右肝グラフトを用いた生体肝移植でした。当科では移植は行われていないため、肝移植を実際見学するのは初めての経験でした。その手術のダイナミックさにただただ圧倒され、特に再灌流した際、グラフト肝の色調がピンク色に変化した時は感動を覚えました。移植外科を志す方が多いのも頷けます。ただ、その後の術後管理は大変そうでしたが・・・

4日目はチーム回診、全体カンファレンス後、手術がありませんでしたので病棟業務などを見学させていただきました。前日行った肝移植の方の術後管理方法などを学ばせていただきました。また16時からリサーチカンファレンスにも参加させていただき、大学院の先生方の研究状況や新たなリサーチなどに対する議論を見学させていただきました。やはり東大でのリサーチは高度であり、新たなものを生み出そうとする発想や取り組み方に感服しました。

最終日は朝のチーム回診後、胆石症に対する腹腔鏡下胆嚢摘出術の手術に入らせていただきました。スコピストとして参加させていただきましたが、お役に立てず申し訳ございませんでした。その後16時から移植カンファレンスに参加し5日間の研修を終了させていただきました。最後に赤松先生チームの方全員と近くの飲食店で食事をさせていただきました。美味しいワインを飲みながらいろいろなお話を

させていただき、チームの方々の優しさが本当に嬉しく、今後も頑張っていこうというモチベーションがより一層高まりました。

今回の研修を通して、自施設に留まらず他施設でいろいろ学ぶことがいかに大事かを再認識したと同時に、自己の立ち位置などを客観視することができる非常にありがたい機会であったと思います。他施設で研修をすることは少し勇気がいることであるとは思いますが、どこにでも恥ずかしくないよう常に知識・技術の研鑽を怠ってはならないことを肝に命じ、それ以上に得るものがこの研修にはあることを後輩には伝え、積極的に参加してほしいと思いました。

最後になりましたが、この場をお借りしてこのような研修の機会を与えてくださった日本臨床外科学会、国内外科研修委員会、委員長の高山先生、東京大学医学部附属病院、肝胆膵外科・人工臓器移植外科の長谷川先生をはじめとする先生方、スタッフの皆様、本当にありがとうございました。この経験を臨床の場で生かし、そして後輩たちに受け継いでいけたらと思います。